一　般　演　題　抄　録

17．最近経験した原発性副甲状腺機能亢進症の2例

中岡良介　大野恭裕　木下雅代　西村明芳　坂本　円
由谷逸朗　岸谷　譲　雑賀豊彦　今村　稔　青木矩彦
近畿大学医学部第2内科学教室

症例1　63歳女性，高Ca血症精査目的で入院．入院時血清Ca 12.8 mEq/dlで血清Ca^{2+}は3.14 mEq/l，iPTHは278 pg/mlであった．腹部CT上腎石灰化を認め，44歳右手関節骨折，51歳足関節骨折と病的骨折を示唆する既往があったが特に高Ca血症によると思われる自覚症状はなかった．副甲状腺シンチでは左副甲状腺の腫大を認め，頚部エコー上も同様の所見を認め頚部CTではhigh　density，頚部MRIではT1にてやや高信号，T2にて高信号の腫瘤を甲状腺左側下極に確認できた．種々の内分泌学的負荷試験と全身Gaシンチ，骨シンチにより多発性内分泌腺腫症及び悪性疾患による高Ca血症は除外され，原発性副甲状腺機能亢進症と診断し手術施行した．左側下極副甲状腺に20×13×6 mmの腫瘤を認め腺腫と嚢胞が混在しておりこれを摘出した．組織学的には，腺腫による原発性副甲状腺機能亢進症と診断された．術後，低Ca血症，テタニー等認めず，PTH，Caも正常化した．

症例2　53歳女性，50歳時に乳癌の既往があり，外来にて経過観察中に高Ca血症を指摘され精査目的で入院．高Ca血症による自覚症状，腎結石は認めなかった．血清Ca 11.1 mg/dl，血清Ca^{2+} 2.94 mg/l，iPTH 71 pg/mlで検査所見上は，原発性副甲状腺機能亢進症が強く疑われたがiPTH 1.1 pM/lと正常だった．副甲状腺を中心に精査を進めた所副甲状腺シンチでは異常を認めなかったが，頚部CTでは甲状腺右側上極に腫瘤を認め，頚部MRIでも，同様の部位にT1でやや高信号，T2で高信号の腫瘤を確認出来た．頚部エコーでも右側副甲状腺の腫大を認めた為原発性副甲状腺機能亢進症と診断し手術施行した．右葉上極に茶褐色の20×13×5 mmの腺腫を認め，病変部を摘出した．組織上は腺腫と過形成の診断困難であったが，正常組織と連続性を示唆する所見があった事より過形成と診断された．最近経験した原発性副甲状腺機能亢進症の2例を報告した．

18．尿路結石形成ラットにおける女性ホルモンの結石形成抑制効果

高村知論　山手貴詔　梅川　徹　栗田　孝
近畿大学医学部泌尿器科学教室

目的　尿路結石症の発生頻度は小児期および更年期においては性差がないものの，生殖期における男女比は3：1と報告されている．このことは女性ホルモンが結石形成に対して，抑制的に働くものと考え，実験的に結石を誘発させたラットを用い卵巣摘除および女性ホルモン投与が結石発生にいかなる影響を及ぼすかを検討した．

方法　1）卵巣摘除をおこなったA群，C群および卵巣非摘除のB群，D群を作成した．結石形成目的で週3回ビタミンD_3 0.5 μgと5％エチレングリコール0.5 mlをA群，B群に対して12週，C群，D群に対して4週投与した．

2）上記C群と同様のE群，G群またD群と同様のF群を作成した．さらにG群に対しては女性ホルモンを補充する目的で，週3回エストロゲン0.1 mgおよびプロゲステロン2.5 mgを投与した．結石形成の程度は，組織学的に確認し，同時に大腿骨遠位端MD法，エストラジオール，ハイドロオキシプロリン，その他各種結石関連物質の測定さらに腎組織中カルシウム含有量を検討した．また結石マトリックス成分の一部であるオステオポンチンの腎組織内量をノーザンブロット法で測定した．

結果　1）卵巣摘除群は卵巣非摘除群に比べ血清エストラジオール，尿中クエン酸排泄量，および骨塩量の低下がみられ，結石形成は促進され，かつ形成される範囲も広がっていた．2）女性ホルモン投与により腎組織内カルシウム濃度の低下，腎組織内結石形成の抑制がみられた．3）卵巣摘除群では卵巣非摘除群に比べオステオポンチン量が有意に増量していた．

結論　女性ホルモンは骨代謝およびオステオポンチン産生への影響を通じて尿路結石形成を抑制することが示唆された．